強盗殺人事件を犯した被告人に死刑か無期懲役かの究極の判断を迫る裁判員裁判の演劇。
被告人を演じた関口まなとさん、情状証人として出廷した母を演じた竹下景子さんに
公演直後にお話をうかがいました。

公演情報

参加型裁判演劇「極刑」農大一般公演

会場：東京農業大学世田谷 CP 横井記念講堂
日時：令和7年8月30日（土）14時30分
出演者：竹下景子（被告人母役）
関口まなと（被告人役）
西澤香夏（被害者娘役）
三咲順子（検察官役）
秋葉陽司（弁護人役）

ー実の親子として演じられましたが、まず率直にご感想をいただけますか 。

竹下　自然に親子の役を演じられることができてとてもありがたかったです。

関口　親子とはいえ、劇中の状況や関係性は全然違います。ただ感情の面ではやりやすかったかなと思いますね。

ー観客が参加するという裁判演劇でした。

竹下　こういう経験は初めてだったので新鮮でした。もちろん役として演じているんですけれども、とてもリアルな空気で、演技であることを忘れてしまいました。

関口　僕は横浜公演で観させてもらってるんですけど、このスタイルはすごく面白いと思います。実際やってみて自分でもとても楽しかったですし。

竹下　裁判員裁判の流れがとてもよくわかります。観客としてただ観ているのではなくて、実際に意見が言えて、投票できるこのシステムが素晴らしいですね。

関口　なんかこう、演じている人と観客が勝手に本気になっちゃう。

竹下　そうそう、なっちゃうわね。

関口　これからどんどん広がっていって、いろんな人に裁判員裁判を疑似体験してもらえたらいいなと思います。

ー台本にない質問が飛んできますよね。アドリブ芝居はどうでしたか？

関口　どんな舞台でもそうですが、背景とか生い立ちとか一応全部整理はしますね、自分の役について。だからまあそこそこ答えられるとは思うんだけれど。どんな質問が来るかなっていう楽しみが半分と、すごくお腹痛くなるのが半分と、って感じです。

竹下　うふふ（笑）、そうね。
なにしろお稽古がないので、もうぶっつけ本番という意味での緊張はありました。ご参観くださった皆さんが、私の役をその役として受け止めてくださっていたら嬉しいです。

ー今日の判決は無期懲役でした。いかが受け止めましたか。

関口　ちょっとダメかと思いました途中。なんでだろう、なんでかわかんないんですけど、あぁもう…、母と会えないんだな…というふうに思ったんです。で、判決は無期懲役。ああ無期なんだと。なんとも言えない感覚でした。

竹下　同じく胸がいっぱいです。自分のことの様にこの判決の言葉の重みが響いてきました。死刑が下されたらそれはそれで納得すべき事柄だとは思いますけれど、母親としては、少しでも可能性を感じて更生の道を歩ませていただけた、ってことが本当にありがたくて。この与えてもらった命を無駄にしないで生きて欲しい、というふうに研一に対して心から思いました。

関口　この舞台を作っている人間として見た時は、多分、最終的な結果が無期だからどうとか、死刑だからどうっていうことよりも、どれくらいせめぎ合ったか、どんなことをみなさんが考えて投票したか、そして別室でどれだけ話し合って、こういう判決を出してくれたのか、というところが一番肝かなと思います。会場を出てからも持ち帰ってもらえる様なお話があったのならすごく嬉しいと思います。

ー演劇をご覧になられた方、またこれからご覧くださる方へ、メッセージをお願いします。

竹下　こういう形で裁判員裁判を自分のこととして考える、このスリリングな経験というのはなかなか出来ないと思います。命を考える上で、無責任に言わせていただければとても面白い、でももうひとつ言い方を変えればとても切実なこと。これが実際の法廷で行われているっていう、そのことを擬似体験できたのは私自身とてもいい経験でした。ご覧いただいた皆様とその想いをシェアできたら嬉しいです。

関口　この演劇を言葉で言うとすごい簡単だと思うんですよ。裁判をシュミレーションして　最終的には自分が判決を下すっていう。でも実際に僕も観させてもらって、また出演させてもらって、こういう風に自分が思うんだとか、考えるんだ、迷うんだっていうのは、多分観に来てもらって実際に体験しないとわからない。だから是非体験して欲しいと思うんですよね。これから新潟長岡でも公演があります。今後も続いていくシリーズだと思うので、もし機会があれば是非会場に足を運んでいただければなと思います。